見てみよう！歴史災害記録と旬のあいち

June 2026 vol.146



◆二見興玉神社（ふたみおきたまじんじゃ）

所在地：三重県伊勢市二見町江

交　通：JR 参宮線「二見浦」駅 北東 約 1.2km

お伊勢参りは二見から、とも言われる伊勢市二見の二見興玉神社。二見の浦は禊浜とも呼ばれ、古来、伊勢神宮の参拝者が参宮を前に浜辺で水を浴び、身を清める禊祓をした禊場です。伊勢参宮前の二見興玉神社への参宮は『浜参宮』と呼ばれ、禊を祓い身を清める往古よりの習わしとされています。二見興玉神社のご神体は、東の彼方にある神々の理想郷の国、「常世の国」からやってくる神が、最初に寄り付く聖なる岩とされる興玉神石（おきたましんせき）で、神社のご祭神・猿田彦大神の生誕にも関わる神石であると言われています。観光スポットにもなっている二見の夫婦岩は、かつては天の岩門と呼ばれ、興玉神石の鳥居として見立てられているもので、神社の始まりは、この興玉神石を大神の坐す島と崇め敬い、夫婦岩に注連縄を張って神域と俗界の結界とし、遥拝所を設け拝礼したことによります。

二見の夫婦岩では、夏至の前後の約 4 か月間、夫婦岩を構成する大岩（立岩）と小岩（根尻岩）の間からご来光を拝むことができ、特に、夏至の前後約 2 週間は、200km 先にある富士山頂を背にした朝陽を望むことができます。また、冬至の頃には夫婦岩の間から昇る月を見ることもでき、朝陽とは違った幻想的な景色も楽しむことができます。

さて、興玉様と慕われる、この二見興玉神社のご神体・興玉神石は、地震・津波にゆかりがある神様です。興玉神石は、三か所に柱が立った楕円形の平石で、名勝・二見の浦の自然とともに、古代よりこの地を鎮めてきました。かつては海水面から露出していたのですが、現在は暗礁となり、夫婦岩の沖合約 700m の海中に鎮座しています。この地域はたびたび南海トラフ地震に襲われる地域で、興玉神石は過去の地震（宝暦年間、18 世紀の地震、安政の地震など諸説あります）で海中に没したと言われているのです。4 月頃の大潮の際には、無垢塩草（甘藻）が岩礁に繁茂した興玉神石を拝むことができるときがありますが、普段はその姿を現すことはありません。なお、昭和 35(1960) 年チリ地震の津波で、引き波で水が引いた際には、一時的にその姿を現したとされています。

二見興玉神社や夫婦岩がある二見町茶屋地区は、国の南海トラフ巨大地震被害想定で最短 20 ～ 30 分程度で津波が到達し、最大津波高は 5 ～ 10m に達するとされており、南海トラフ地震の発生に備えた避難訓練が行われています。茶屋地区の避難訓練は、観光地である特性を踏まえ、観光客役も設定した広域的な訓練として実施されています。

境内には海の神様である綿津見大神をお祀りする龍宮社もあります（裏面参照）。龍宮社は、寛政 4(1792) 年 5 月に発生した大津波の犠牲者を追悼するため、また、海神の憤りを鎮めるために江川河口にお祀りされたもので、のちに二見興玉神社の境内東側の現在地に移され、龍宮社と呼ばれるようになりました。


二見興玉神社


夫婦岩





◆災害にまつわる碑や史跡には、実際にその地域で起こったことが記録されているだけでなく、当時の人たちの思い（二度と被害を繰り返さないように、など）が込められています。碑や史跡の前では、災害が実際にこの地域で起こるということを実感していただくとともに、そうした先人たちの声に耳を傾け思いを巡らせ、身の回りの備えにつなげ、これからの防災に活かしてください。

◆見てみよう！歴史災害記録と旬のあいち バックナンバーから

● 安楽寺 (vol.40,2017.8)

所在地：知多郡南知多町日間賀島字里中
交　通：師崎港または河和港からフェリー

日間賀島の東に安楽寺というお寺があり、金色に輝く『章魚阿弥陀』と呼ばれるお地蔵様が安置されています。たこ阿弥陀様について、地震にまつわる昔話が残されています。

あるときのことです。茂二郎さんという島の漁師が、この大磯のあたりでたこ漁をしておりました。（中略）やがて縄の先についたたこつぼが、青黒い海の底から見えてきました。つぼの口からたこの足がはみ出しています。「これは大きいぞ。」しぶきといっしょに大だこの入ったつぼが、舟の中に飛び込むようにしておさまりますと、茂二郎さんは、つぼの中からたこを引き出しました。

「やや、何だ、これは。」たこがあまりに重いので、はじめは石でもかかえているのかと思いましたが、何だかぴかぴか光るものをしっかりとだいているようです。よく見ると、それは、阿弥陀さんではありませんか。びっくりした茂二郎さんは大急ぎで島に帰ってこの阿弥陀さんを安楽寺に届けました。この阿弥陀像は、海に沈んでしまった寺のものだったということです。」

安楽寺に届けられた阿弥陀様は、以来、氏仏様として島の人たちの信仰を集め、正月三日には、年に一度のおまつりが行われるようになりました。おまつりは、丸太と縄で作った御殿に神主と世話役が入り奉納の儀を行ったあと、御殿の中で酒盛りが始まったところで、若者たちが外からゆさぶり、七人衆が驚いてほうほうの態で逃げ出すというもので、日間賀に大地震があったときのことを伝えています。


たこ阿弥陀如来と絵馬

◆詳細は、見てみよう！歴史災害記録と旬のあいち vol.40（https://www.gensai.nagoya-u.ac.jp/rekishijishin/geppo.html）をご覧ください。

★ 郷中施（ごじゅうせ）

二見興玉神社の境内社・龍宮社の例祭に合わせて執り行われる郷中施は、過去の災害における犠牲者の追悼と、郷中（村中）の安全を祈願する祭りで、毎年旧暦の 5 月 15 日に行われます。（2026 年は 6 月 29 日（月））

寛政 4(1792) 年 5 月の大津波で、神社の氏子区域である江地区では民家が流出し、残った民家はわずか 5,6 軒となりました。このとき、村人たちで助け合い、郷中で施し合って立ち直り、以後、犠牲者の追悼と郷中安全の祈りを込めて、郷中施が執り行われるようになりました。


二見興玉神社 HP より

当日は、江地区では一同で龍宮社に参拝します。小船に乗せて流すお供え物には、きゅうり・なす・みる・おご・まつ菜等が選ばれ、津波が「急にきたら見るな、待つな」「おごるな」との先人達の教えが受け継がれています。

～路線バスで巡る～


三重県 HP より

二見へはかつて、国鉄・近鉄の伊勢市駅・宇治山田駅から参拝客を輸送する、三重交通神都線の路面電車が走っていました。路面電車は昭和 36 年に全線廃線となり、バス路線に替わりましたが、県道 102 号線沿いに残る五十鈴川を渡る橋の橋脚など、数多くその面影が残り、神都線の車両を再現したレトロなバスなども運行されています。

●ブレイクタイム●

♪ 二見の街並み

二見は、伊勢神宮を参拝する前に身を清める場所として、また、参拝者の宿泊場所として栄えた街で、JR 二見駅から二見興玉神社へと続く夫婦岩表参道には、純和風旅館や和風建築の土産物屋が軒を連ねています。木造 3 階建て、明治 20 年竣工の元旅館・賓日館（ひんじつかん）は、創建当時の面影が残る国指定重要文化財です。平成 11 年まで、伊勢神宮に参拝する皇族などの賓客の休憩・宿泊施設として活用され、現在は資料館となっています。（2026 年 3 月から文化財修復工事等のため休館中）。


観光三重 HP より

◆ この地域の災害に関する碑・史跡、資料・体験談集、地域に残る古文書、研究資料、郷土史研究者・団体などの情報がありましたら、gensaisan2014@gmail.com まで情報をお寄せください。

◆ この地域の歴史災害記録をオンラインツアー形式、マップ形式で紹介しています。各地の碑や史跡等にご興味をお持ちいただけましたら、『災Seeing』のホームページ（https://www.saitoseeing2020.jp/）をぜひご覧ください。

（発行：減斎の会・名古屋大学減災連携研究センター　2026 年 6 月）